

50周年を迎えて (4)

「雪舟は教師であり、雪村は絵師である」

大和文華館 前館長 水田 徹

いきなり刺激的な、しかも雪舟の愛好家からはお叱りを受けかねない表題で恐縮であるが、これは大和文華館の先々代館長、吉川逸治先生の発言である。

昨年末、先生の没後10回忌の日、先生の講義を直接拝聴した教え子たち有志が集まり、ごく内輪に偲ぶ会を催した。「生きていたら、今日で百歳になれる筈」に始まり、公私にわたり様々な思い出話が披露された。それらを集約すると、先生の無類の日本・東洋美術びいきが浮き彫りになる。

先生に課せられた自由課題のレポートで高評価を受けるのは、どうやら何時も決まって日本・東洋美術の作品を取り上げたときで、肝心の西洋美術史関係のテーマはさっぱり注目されなかったらしい。それも作品ないし作風分析に記述が及ぶと随所に花丸が付いて、最後の評価欄には「その通り！同じことは西洋では誰々のこれこれの作品に当たるんだ。すばらしい！秀！」と大書されたという。「そうなんだ」といって一連の

発言を引き継いだのが、雪村研究家のA氏である。氏によれば、ある夜突然奈良から電話されてきて、「君、雪村は絵師だが、雪舟は教師だよな」と宣った、というのである。折しもそのとき奈良、大和文華館では、秋の特別展「雪村展」が開催されており、一方A氏は『雪村研究』を執筆中であった。

「そう仰って先生はあなたを励まして下さったんだよ！」「そうだ、そうだ！」と一同、先生のお人柄とご学恩に改めて感じ入ると同時に、ある意味さきわめて厳しく、かつ正鵠を射た先生のご発言に、今一度心打たれるのであった。

その大和文華館の「雪村展」が開催されたのは昭和56年、先生が奈良に赴任された年の秋のことである。その冬刊行の『美のたより』第57号巻頭に、先生は「雪村画の魅力―特別展雪村を終えて―」なる一文を次の文言で書き始められている。

秋も深まり、大和文華館の山の木々も紅葉が目立って

参りました。この秋を送り、冬の準備をする季節に印象に残るものは、今年の特別展の雪村のことです。大和文華館は初代館長の矢代幸雄先生がこの独創的な禅僧画人に並々ならぬ関心を寄せられ、苦心して雪村の作品を集められましたので、館の所蔵は「呂洞賓図」の名品や「花鳥図屏風」の大作など五点に及び、なかでも晩年の「自画像」がありますので、雪村の人柄に親しく接するが如く感じて参りました。

—中略—

西洋画の鑑賞に長年親しんだ私には、陳列された雪村の作品のなかで特に心惹かれたのは、院体画を学んで描いた彩色画です。

—中略—

東京の所蔵家から拝借した「書画図」や兵庫県の所蔵家から拝借した「官女図」も、謹直な筆で克明に舶載の名画を模倣して描いた彩色画であります。これらも、絹が焼けて暗褐色になって、まるで16世紀の北欧の油彩画で克明に描いて写実的で、かつ幻想的なところのある作品を想起させます。ことに「書画図」の細かい、力の凝縮された筆致で描くイメージは、この暗くなった絹

地のせいか、幻想的に感じさせます。雪村は西洋の16世紀のマニエリスムの時代風を遠く離れて、孤独のうちに感じて居たのかと空想されるほどです。

—以下略—

因みに文中に東京所蔵家蔵とある「書画図」は翌昭和57年に、先生のご尽力もあって大和文華館の所蔵品となり、さらに昭和61年には「孔子観欽器図」も加わって、「雪村を見るなら大和文華館へ」という次第になっていることは皆様ご案内の通りである。

今後とも年々にますます立派な特別展が開かれ、そしてその度毎に館所蔵品が充実していくことを、50周年記念日を間近に控え、改めて心より祈念申し上げる次第である。

なお上に引用させていた吉川先生の一文は「美のたより」巻頭の「美術の窓」欄第1号！に当たる。また私事ながら、先の偲ぶ会の盛り上がりが昂じく吉川逸治記念「美術史を語る会」が発足し、その第2回講演会が来る初冬にも開催される予定である。次回は中部、関西の方々、わけでも大和文華館、友の会の皆様方にも広報させて頂ければと願っている。

図 1



図 2



図 3

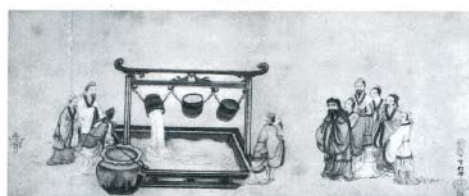


図 4



図1 「シルクロードの絵画展」で記念講演される吉川前館長 図2 雪村「書画図」(大和文華館蔵)
図3 雪村「孔子観欽器図」(大和文華館蔵) 図4 水田徹前館長(向かって左)

季刊 美のたより No.171

平成22年8月1日

発行 大和文華館